

「京都文教大学海外学術研究助成金」 交付による海外出張報告書（1頁）

2015年8月31日提出

申請年度	2015年度（平成27年度）		
所属学科	総合社会学科	職・報告者氏名	教授 手嶋 英貴
海外出張内容 (種別に○)	目的：XXIth International Association for the History of Religions World Congress への参加（個人発表含む）		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">学</span> 会</li> <li>・ 会 議</li> </ul>
	訪問国・地域：ドイツ・エアフルト市	助成額 256,610 円	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 調 査</li> <li>・ 研修/セミナー</li> </ul>
期 間	2015年8月24日（月）～ 2015年8月29日（土）		5泊6日
上記出張期間 の研究・調査等 活動経過	8月24日・・・往路移動（京都～関西空港～フランクフルト～ヘルシンキ～エアフルト）		
	8月25日・・・学会参加、個人発表		
	8月26日・・・学会参加		
	8月27日・・・学会参加、復路移動（エアフルト～フランクフルト）		
	8月28日・・・復路移動・機中泊（フランクフルト～ヘルシンキ～）		
	8月29日・・・復路移動つづき（～関西空港～京都）		
研究・調査 発表等概要	<p>今回参加した International Association for the History of Religions は、国や地域、さらに宗教の別を問わず、世界のあらゆる宗教文化に関わる研究者が集まり、学際的な交流を行う点に特色を持つ大規模な学会である。報告者の発表も、こうした学会の方向性に合わせ、インド以外の地域にも共通事象のあるテーマとして「王権儀礼」を扱った。具体的には、“Promotion of the Sacrificer’s Status through the Ancient Indian Kingship Rituals”と題して、紀元前6～7世紀頃以来多くの王侯により行われてきたラージャスーヤ（即位祭）とアシュヴァメーダ（馬犠牲祭）の二つを取りあげ、それぞれの祭式を挙行することで王の地位がどう変化するかを分析した。</p> <p>両祭式の挙行による地位の変化については、著名な比較宗教学者である George Dumézil がその著作 <i>Fêtes romaines d’été et d’automne</i> (1975) において見解を公表している。そこで Dumézil は、古代ローマの祭式や古代イランの社会的諸観念を比較材料としつつ、ラージャスーヤが祭主に「王位 (royauté)」を授け、アシュヴァメーダが王を「帝王 (empereur)」にする祭式であると述べている。しかし、こうした解釈を指示する文献上の確かな証拠はなく、先入観に導かれた一想定といわなければならない。</p> <p>今回の発表では、Dumézil の所説における問題点を指摘したうえで、実際の文献資料を詳細に検討し、両王権祭式の意義について最も妥当と思われる見解を提出した。つまり、アシュヴァメーダの挙行によって王が得るのは、Dumézil が想定したような「権限の量的拡大」ではなく、宗教的局面でオーソライズされる「権威の質的上昇」であると結論づけた。例えて言えば、日本史において上皇が出家し法皇となる場合と似ており、そのことで政治的権限は拡大しない。ただし、宗教的権威が加わるため、臣民からより多く尊崇を集められる点に意義があったといえる。</p>		

「京都文教大学海外学術研究助成金」 交付による海外出張報告書（2頁）

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究・調査発表等々の成果の概要</p>	<p>□ 上記内容の発表により、古代インドにおける王権祭式を通じた祭主（王）の地位上昇を、「権限の量的拡大」から「権威の質的上昇」への変化、という観点から初めて整合的に説明した。</p>	
	<p>□ セッションには古代ローマの祭式に関する発表も含まれていたため、ローマやギリシャにおける宗教文化との接点を探る質問やコメントが数多く寄せられた。地域や宗教ごとの専門学会と異なり、比較的・学際的な視点により王権祭式の意義や構造を捉えなおすことが出来た。</p>	
	<p>□ 三日間の学会参加中に多様なセッションに参加し、新たな視点を得ることが出来た。とりわけ、Dumézilによるインド＝ヨーロッパ語族文化研究の有効性と問題点が、多くの研究者と交流する中で明確になった。つまり、Dumézil 研究は「三機能説 (trois fonctions)」と呼ばれる最古層の観念が印欧諸語の文化・社会内で随所に見られる、という大枠の指摘は有効である。ただし、個々の言語圏・文化圏に分化した後に蓄積された観念・事象がある点に十分な注意が払われていないため、個別事例の解釈を誤ることが多いという問題がある。</p>	
	<p>□ インド学の専門研究者としては、リエージュ大学（ベルギー）のフィリップ・スウェネン教授がセッションに参加しており、学会参加中に有意義な議論を多く交すことができた。学会後も互いの研究成果を交換するなど、継続的な学術交流が生まれている。</p>	
	<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究・調査等の成果発表予定</p>	<p>雑誌論文： Hideki TESHIMA, Promotion of the Sacrificer in the Ancient Indian Kingship Rituals, Journal of Indological Studies（掲載巻号、発行年等の詳細未定）</p>

<p>① 現地の写真</p>	<p>学会/会議：会場風景 調査：調査地の様子 セミナー：会場の様子</p> 	
<p>② 活動状況の写真</p>	<p>学会/会議：発表時(聴講時)の様子 調査：調査実施時の様子 セミナー：聴講時の様子</p> 	
<p>③ 協力者などの写真</p>	<p>学会/会議：運営担当研究者あるいは知己の研究者 調査：研究協力者 セミナー：主催者/講師</p> 	
<p>④ その他関連写真(任意)</p>		